

## 談話室

## わが大学の思い出—大阪大学—

松田 順二\*

一般表記のような随想風のテーマを頂戴したものの、正直のところそれ程の技量も持ち合わせていないし、またふさわしい記事も余り思い当たらず少々困惑してしまつた。しかしとにかく思い出せるままに1部紹介することにした。

まず私の母校大阪大学工学部冶金学科の前身は、明治29年大阪工業学校冶金学科に始まり、同34年大阪高等工業学校となり、さらに昭和4年大阪工業大学と改称され単科大学に昇格している。そして一方同5年に医学部と理学部の2学部より成る大阪帝国大学が設立され大阪工業大学も同8年にその大阪帝国大学に1学部として編入されている。そして戦後新制の大阪大学と改称され現在に至っている。このように私の母校の冶金学科の歴史は古く伝統のあるものであるが、工学部自体の学科数、学生数の増加に伴い昭和42年頃から45年頃にかけて狭小となつた大阪市内の学舎から、工学部全体が万国博跡の北側に隣接した千里丘陵の吹田キャンパスに移転した。ここには将来大学本部、医歯学部等の大学の大半が移転統合されると聞いている。

前置きが長くなつたが次に私の学生生活を振り返つてみると、それは1年半の教養課程と2年半の専門課程に分けられる。前半の教養課程は冶金学とは無縁で物理、化学、数学等の自然科学、歴史、経済等の社会科学及び外国語等の基礎的能力を修得するものであつた。ただし私の場合どの程度これらの目的を達成できたのかはなはだ自信のない限りである。そしてこの時期は学生は皆大抵よく学び、よく遊んだのではないかと思う。私もサークル活動に参加し他学部の多くの人達と交流した。さていよいよ本題の核心にふれる訳だが後半の専門課程は、1年半の冶金学の受講と残り1年1つの研究室に所属し、受講と同時に卒業研究を行うというものであつた。冶金学の科目は鉄冶金、非鉄冶金、金属組織学、冶金物理化学等々の冶金学全般にわたるものでありその他一般の機械工学、電気工学等の基礎科目もあつた。講義の内容については詳しく思い出せないし、ここに記述の要も無いと思うが、印象に残っていることはほとんどの科目においても、金属の本質である原子配列や結晶構造と

関連づけて講義が進められたことであつた。従つて私自身も変態、析出、転位等における原子の動きや結晶構造の変化が何と巧妙な仕組であろうかと自然の偉大さに感服したものである。特にあのマルテンサイト変態が何万分の1秒という瞬時に起こるということを教わつた時の驚きは今も忘れがたい。

受講と同時に行われた実験、実習は大抵3~5人程度のグループでいろいろな実験をやつたもので、顕微鏡観察、鋼の焼入れと硬度測定、変態点の測定、引張試験等を行つたがうまく行つた時の喜びと、そうでない時は他のグループが早々と引き揚げて行くのを横目に四苦八苦した記憶は生々しいものである。しかしこういう肌で得た知識は後々までよく記憶に残ることから、逆にもう少し実験・実習にウェイトを置いていただければと多少もの足り無さを現在感じている次第である。

専門課程中に何回か実施された全員参加の会社訪問は楽しい思い出として残っている。これは週末の午後教授引卒で大阪周辺の金属関連会社を訪問し、実社会の現場を見て知識を広める目的で実施されたもので、現場の生の雰囲気や少しでも感ずることができた。それ以外に一度は休暇中に九州方面の鉄鋼メーカーも訪問し大いに役立った。もつとも現地解散後多くの連中が九州一周旅行やらその他の旅行をするという余録もついている。これらは多忙な中でも楽しい思い出である。

以上で本題を終わるが、卒業後10年余り経て現在の立場で感ずる所を述べてみると、入社してこの方私の担当してきた工業炉の設計においても、冶金学の分野として、熱処理の知識、耐熱鋼の選定、金属加工の知識、溶接の知識等が要求されるが、大学で学んだ基礎知識が少なからず役立つと信じている。そうは言うものの冶金学を学んだ者としてこの方面に関する知識の浅さを痛感しており、今後も母校のため、そして社会のため、自己啓発に努めるべくこの機会に決意を新たにしている次第である。

さて本文を書くに先だつて、この機会に数年ぶりに母校に立寄つた。私の学んでいた当時は、未移転の他学科の学舎建設の真最中で、周辺には工事中の箇所も多くキャンパス全体が殺風景であつたが、現在は木々も沢山植え込まれすっかり落ちついた立派なキャンパスに変貌していた。

以上回想めいたとりとめのない雑文になつてしまい、御期待にそえたかどうか危惧しつつ結びとする次第である。

\* 中外炉工業(株)